新板
繪入

奇傳彩話

二

へ伊13
2.398
3

門 へ伊13
2398
巻 13

奇傳新話巻之三

游女確言秋山八郎立忠孝

人間乃正不正い性質の自然にようるゆや得道するとよらざるにあるやをるべうべき志と紀し道に学ぶ美い其節と舎して口ふれと唱ゆるとものども其行事皆不正よりなる名ーみ道と学ばんして編輯に紙得ざるべくべく其行事毋のづうこゝにあり豈性質乃正不正よるにあらんや口言自然とおろくおろそかにて確然たるがおろくおれども道に学ばずして行事不正ゆる其乃紙信せざるにようるのこゝろと学ばんして行事正し紀と得るへ人乃善とゝろくこれよ及ばんとし人の不善紙

関てはなまれいまむる去ありう道は天地に徧満ありて
おのれで人乃善君に后は学ふも学ぶるふも世のづから
知り得るまれもくだして道に化とる形う何で人乃なし
性質君子ありとせん今はむりとあんぬ中比関東の執
権北条相模守貞時朝臣祖先の法則にしたがつく将軍
家を補佐して天下を政務の其法乃ごとくに其人
乃賢あること時機相應じて四海安寧形う其比大儀
の駅館に遊女とを多く賜ふ婦家形とはこれ孫謀
欲い朝雲にひぐれ絲笛い暮雨と迎へ士類三民乃幸
かまつに来く歓をたくし奥をとる集含れ席青樓
に登ざるの業は和く其席と徐る事あるべと

あん婦家れうちに出交的多く其眉目乃美しくのこあり
に種これ遊藝に達し或い書と讀詩歌弦線にうに
長ぶるもあり多ふうちに扇屋とやんいふ家
に王扇とよ粉頭あり元禄倉民家のふにく知よ
ま山家につうえて父母も相繼く死失れで其の家こ
とあうえてるれごとくく養育し十四五歳に乃ひて容
顔端麗風姿嬋こしてたとやうれるのこあうに知
より書と好こうく文字式知ふ其比東江先生とやん
いる儒者ありて其文有る式好んで書と学ぶせ
詩と作りむ一歳作りにして能く詩を作り墨蹟巧
にして書體其師の筆法と逼るあまんさく和奇と好

して旅ごろに堂上家よりして地下れの奇をなく自任
せする者ども多くなりて名賞歎ぶしられて甚名仕く
とかくれ多く唐土西郊乃蒲溝と云く是比し甚数
久い建久の名媚虎と云くも何ぞ獨歩なる事と名ん
とて其性質聰敏にしてこづうう媚流よりあるものと恥
て父母家れ大恩と報ずる代なくんと甚だ急
多の中一四海乃遊客甚数よりて甚才と慕ひて一さび
金なる代なく游行の参これ甚家他に
く事出さくきなくくるなも信是代大切乃者とせう甚
ものろ雅波津よりかるまるき豪富乃高家れ多藻金ま
下なく一再青樓と楚こまくまを扇ま金ぶ心情されぐくも

にくろまと數回乃交會にいよく益甚情やむまぶし
ま扇も數多き游客の中に彼生ぶ性質温柔寡言
にして才芸の伶俐多る代愛して甚情代りくこれ
ま遇れ代生在彌金日久し代と代く父母ものろに侵
て故々代せむ生いうんとも甚ぐろ代一夕多りて歓代に
くしまを扇まむうんく洞をるぐ代山地ま多り石思議の
縁と待びて汝と南島むまびて頭史も離れむぶし
いうんせん父母厳しく侵して帰程代やくしむ今一さび
紋といろ乃附ま代ものろ代ま汝ぐんの心路多る代
加りく生会生涯ものろ甚多る甚ものろ古今ようくで
父母に那りく母汝ぐ分とま金に侵ま代くれく代書と

あんらべ〜ちられども初より煙霞よりまさく數多の遊客風流乃中にて心情相通じて始終夫婦乃約あらんも知るべらんにちられを我志りつて汝乃心とたゞ異心かんを我ちらんく家婦とあらべ若しからばこれ迷べし我ちらくしてこれ迷べし我ちらくして其人と緣をむすぶべきめんといひるにて扇生ぶ恋情其意乃こゝにとさひて長嘆一息して涙乃手雨乃ごとく山地よ落れる遊客の智あること忘るも皆其身に半点乃實なく志く只婦婦の誠と得んとたとえば雲漢よ拝よるゞごとく雖ども雲がたもんよ晴をひらまんやゝ晴忘れして一男に情よめでく意志ふる小兒乃其情よりむゞごとく〜かくのごとき

痴漢何人ぞこれ我妻也んや其間よりまく君のごとくに溫和にして才藝あり娼婦乃情よ陳らだして毎のづから其情我あらつるむ我家の好むおんして妻ゑく恋情とまくふ永く歓をさらめんく思くに離別乃時忽いるか妻ゞ心こゞれく麻乃ごとく只其かぎりなき恩情肌骨にきて銘をべらだ今意情とちらんて誠の心とちらく若べし妻はかゞれよとちくく身と立情と違せんとたるに心かし今君乃妻と金銀よかんく婦とかし其先契乃人あらで君乃ちくくして妻ゞ情意とげ去めんとたとの恩情恩言身とちらしても報べらだ妻ゞ心君我大切と思よ実とひく競べ君い高家と

ひとり世く家豪にして人よりあつまれる家あり君その徹
そして婚姻を書とせんを事細先へ對して汚名と氏族よ及
ぶべし旦雙親次しして此事許しあるまじきこれを不
孝の行とれと始とせんを君の双親万一宥恕あらんく此事
あるとも君乃氏族初育れ中一再は構ひく免ひたまふ
人もかあらんあるべしたゞひよ嗣よ仕うんとも心豈敢
ざらんや志うれを君乃毒あと生るれ情い毒実に其
ゆえ君乃身上をとうてうこれを放蕩の行よとらんあるべ
かあらんは君の思召止られく前尾熟いひさしかんし
て下向あつく再其あつく歓とはくさび毒も心と安ん
じて情を楽んと親絶りて変態として別きと侯し

きをふたは生大よそのあらざる感じて行事も古々
にとりて書毎とあるをさらを恨と雑ぶべしせ
情く別涙をとりて涙ありを生きり年歳銀にして生ず書
輪を得くひうえんるに金銀よかんく身と償かあは
父母次してゆるさぶふ事を速ぐく數月乃後かあんだ
下向して相見く其情を語ぶべしとや語りるに毒毒
とかくあるくき事あるいるさ毒にも世よ涙きある信人
うふをうんくゆく費義して指を屋く其東會
の時を涙ゆらぬ月を行日ゆく一歳にらくして雁雉其
にたんく戒方よりれてり書輪も其報ふられべん
恨くゆして楽まんをあひ強て欲よとくぜも

胸中常にこれを慕ふ漸くにして書を能く得てその名弘くるに甚人にあらざる新旗乃内ゐるよりにく
わく生と使ひ来る相識乃人あり甚人の書翰
ゐれども心神ぐろひてゐるにかの生風邪よ犯
さまし疫氣甚しく京洛の名醫とにくにとりくども
甚だうるく高くよ病死せり死に臨みて枕頭
て援かゐるべき家へ此まを毎年遣ゐれ居しとくまく
の遺言にくその変とをするにく送物ホ多く
来まべ家学んだ一変呼びて地よ倒まれば家内
たよ神ぐろひてこれと補け醫薬とりちひて常に
かりまを義ようくえくく一七日の喪にあり寺院よ

よりくく石碑と建て供養とにくして冥福といのり
みづくくえくれ金銀とゐげうくこれと當三百ケ日
にあるくく同門乃和哥れ女十人とあれきのつわ
秋とそくめ追善の和ゐと旅くこれとゐ和其ホ
宿に一同引出おしてかの生ゐ恩と報ずるまを
ゲ方すそれいんぞや婦女にくくまゐる者ら義云
乃ゐとせんゐ世の去れゐくくにあるきゐゐり其
は京ゐ禁庭に嘉儀ありて勅筆家より賀使と
て秋田城を助と上洛ゐさしむ秋田氏実法にして
驕奢ゐ好こゐ度の上洛栄れ使節ゐりとて家士よ
如三年れ奉届とあるくゐと且金銀を下して面くれ拒衣

東馬鞍下より乃出立までちらくして義羅より新
たぐさ有命じきれで呂さんはごりにきるんは情は命
今よ俠然こして有風流をそろえて出立すり出
呂乃日は藤金中舞集とかー荒沢大磯乃駅まで横浦
とかまんくくもの乃粧とんと元美男女狂乃るらごと
くけせちらしね貞時朔尼はりひさ式関く大よあ
中このひ秋家代く俠素弘めんて乃跡とたちるた
はな秋田が孺慢の旅粧行ものやとむ中と脱ーのよ
ゆに横目の有ひそろに上達ーきるは城を助を来大磯
の媚楼に遊んでむ扇このる游女と寵遇ーてはたの
上京衛羅とかさりて甚乃粧と彼よんをて旅らん

中の猪横ふりとうんくんで貞時朔尼甚驚愛あ
りく世の中淺季とありて法を守り俠とあたくく
ども家門のうちよりかくれおこそ狂人乃乃とあた
嗚呼やんわるかふと涙と流ーのひるが秋田氏政府
乃後ひそろに飄蓮ありりれで城を助梅梅はたこ後
悔して甚乃事とあらためきるやあり山時むを扇とを
義乃命にちこがんく容儀とこがこ衣裳とかざりきん
おきに出くおを氏見送り立帰りて中きるは世乃中
も今はを生までにくいるあるは測の災難ら出来ん
縁金の大身天れ国めとものもある人乃かくれおこそ狂
態とあるくかりうこ立極乃至極かあ むべとあ

久藏父子ね秋田氏知之の日小条宗宣乃家臣秋
山右衛門が將同名八郎信勝といふる者才明勇烈ふ志
て眉目西ろ〻ぐ〻しくある世家だろれ勇士ともえ
抑よ所之り阪路海ろ〻にそ〻ぐ之ゆる途中にく
辭狂乃士七八人よ出會せ〻に彼辭人ども云ところ狼
藉に及びろれど八郎自己乃伎倆よ恃みて一人を
も顧ず辭よ及び暫時よ八人を切伏せり狼藉者ども
に復意ろれ〻ろれいよ於の制あれば先の相手皆下卒
ろれを行のさろりあくまでと思ひ一に右八人の
内二人ハ小条宗方の下卒にく宗方服あきさ人ろ
きいさるぐれりつきとろり父之清八郎を勘當して

其ろ者よすこねは八郎信勝せんろ〻ぐ二君よ仕ふる
志もろけまば者に大磯の媚樓よ徘徊して其任侠去
え来信勝ろ宜に来るを聞びてこれをたんとび師と
称しろれば信勝下知して順弱ろるをたすけ暴強ろる
とよ擯ろ〻事ども跡ぶ〻ろれば媚家にも乞ハ
ようこんでこれ試ろ〻こいよく信勝をそ〻び弱ひを
ろ八郎ろ形容義藤ろれを媚婦ハ深氣の情をりつて
乞ハいどむこ〻ども信勝一ろとろ〻ろ〻ろ或時扇
屋にく祖先乃佛者あつて建長寺れ元和尚ハ招
待して冥福をいのりに信勝をたのこて乞を意對
せ〻む食應の間信勝ハ明ろう〻佛理も悟きれば

席上乃談話も奥あり て和尚ふくさを式称し詩賦
の編よりふく和尚乃曰唐の代よ楽府と絶句に作りて
風流の歌びとせり我国未詩風ひらきぐ只家儒の理
屈乃詩を詩と思つるでなりうん貪道唐士にあり
附唐の王昌齢ぐ絶句李白にあんで温庭風流ふれ
ぐ山詩を学び含したりと昌齢ぐ青楼曲二首とと
ふえく其詩素を述るに一座耳をそ風し信勝弦
感ぐして即座に一絶を賦に

秋風病起倚新粧隨例歌吹心自傷
誰謂柳絲能繫客垂垂唯為一人長

和尚これとうんく大よ賞称ありて是下い誠ま才子か
つ其頭家の称にあらぐと評しるふにうるも奥を信
しして玉扇とよひて信勝の詩とうんせ側の扇面ようう
させるに玉扇山詩を吟じて晴よ我意に符合するに
感ぐて臆とるるぐふく侯容ようて毫を揮ひ筆勢
雲煙とうんつて書し終りうるに呈しるれぐうるに
ようと和尚よりるに一座驚嘆して実ま王右軍にせ
まれりと称しね和尚よ信ひ来る一傍たるもれて曰
信勝君玉扇ぐ義屏しし戈藝相敵ぐと云れ
ぐ八郎ようよ恥入りむ玉扇も面を掩ひ思らぐ信勝と同
とぐ合せ既よ意情乃縁とむすぐり席をりて賞
ぐ云ぐく信勝快ぐうして矢ぐるれあるぐぐうよく

考くふんをもて玉扇が製又才藝に情意のせまるをふり
なれば年十七八歳より今日にいたりて眼よ婦人女子と
ふつゝ意に情を動したるゆゑ今日玉扇と宿夫よ
見るかくれなくゝ情意を引くあやまりべしとおもひか
ゝるに意情ゆゑかゝ甚意親さるゝと書きてあ
て殆うりるに彼も其日より情をきりにうごひていま
だ初よあらわさゞるども其書をとんく搭ゆゑ
遊女とあつくしたなむよけふ人と相ふれく情式諸ん
もはうりがさしあだゝくはなんとあるばかりぬど
き才藝容貌美びすぐれる年おみあるべしとも
ゝんこんと意と返書してされより意ひるれて日を

遊ひ月をさゝこ〜驕慢〜して其地ようれ名代たり
其のちわゞありて信勝が父を清加より密書到来
ちゝ小条氏族乃うちに変ありて小条宗方同氏
時村とせめさろせ〜にようゝくを人宗宣その親まを
篡りてあたんこんしたはけるせ来ゝばは敵免あって
秋勢當もれのづゝゆゑ乃べし早く馳参乃べし
小ありきれを信勝いはけ玉扇よ情式蒲ゝ精神
花洋とゝてゝ父の恩免と情べゝ乃べく黙〜て考思
あんとを扇あやゝ〜ゝて父乃書簡を藤〜て大よれ
どゝさを厳回大乃時いゝれり行時も遅疑ゝ乃べ
き者にあゝべ早く馳参系あゝべきゆゑとて信勝

曰我身の幸はよろこぶべきなれども只
汝と今別るゝこと苦しきよせん忠
孝をあげうして生涯汝と世況たゞ一人とうらた
ましく我は志さぐんやとのたまふ扇之亟う感傷に
堪め給ふ言行とゝのひ人間ハ一やうゝ
きゞもひきて士卒ハ忠孝と生涯乃義用とを全く
公く馳参あらく剛勇なる敵の勇威とをく敵を
破ゝべ打てくくへ敵多あるべうだ切手て將軍執
權乃賞とうけ君父の戒と解ひて父母と書ひ君上
に奉仕た士卒乃能者此うくよ出るあゝんやつづうた
一人の婦女のために情を斷事あるうだ大事と謂ん

とた其ひうく我身をうてうこれ身ハ空れる家のく業乃
風よあうするごとく日夜遊客と迎へ送るハ游汝の常よ
話環とるに似り朝ハ源家の妾とあり夕ハ平族の
婦とある扨のごと兄失撫の婦人大太まる人相對とるすら
恥べし況哉と言とする とや為今迄とゝく天下に英
雄と呼り今に至て四海の一婦漢あるゆと云れり妾婦人
にて敵よ閉恥りめと為ゝ激怒して妾と二刀れ下た切
害して早く急雖よ新くべと客貌端正聡中さうもた
きく一息臨る笑かれ武勇信勝氏剛よ励
さん席を打て賢あるかる勇あるかれ我心言下に忘れ
とゝろり事あるべ新く恩と謝とべ一対死せべ今日で

奇傳新話卷之三
四十三

奇傳新話卷之三
四十四

別ありぐーと方拝ありく立出れば扇基侯ありく側乃
勝負と打鉋とありく送りなるとつよ信勝光
ホとして古乃巴静伊ぞ伊よ増りんと云捨ありくりなた
ア比い加元三年小条宗方同氏師時と旅と諍ひりる
に小条時村師時と交互してりる氏助るに同て師時ら勢
ひ猶盛ありりる氏宗方大よ憤りく逐よ将軍家九命
と偽り軍勢を催して不言りよ時村ぞ鉋と図こ悪く見
と殺傷ーりれば負時胡居大よ怒りくさんりく小条宗
宣宇弟文胡綱と合して宗方と伝せりむ宗宣人数と
ありて出馬の西く秋山八郎信勝還一編して馳付勝甲去
て信ひりんりとりよ宗宣喜で平士い得ありく勇士

いあぐーー汝四りて雑よ弟く見氏助きんりる其志よ免
して召連くーと有りれい父云清も八郎も涙を揮く思氏
謝ーー恵よ宗方ら邸よ押寄せるに兼て覚悟の宗方人
数と揃て防戦ありる勇ーかりれで寄手も暫時ありき
ありてたりりる秋山信勝大ある斧を投ぎて孔雀
の間と云切よ馳入斧振よりく門の扉と二つ三つ打よりく
ーがりぞ有るまんて扉ありる敬勢膳を冷ーりる
也敬立と有りかりと斧孔雀ーー敬立るに見よ尚ふ
者二人三人打倒されでりて有かー鮮合引交よりるりと
宗宣胡綱の母ぬ云先よ案出りて下知ありに紅よ如軍
氣よ案ぐく一同よりて入行端より薙立るに敬軍八方

に散乱して宗方せんさくを書子と云教ー自教せんとかを
をもふく秋山信勝駿府にて礼義をこゝー意と其首を討る
て逆徒一味を滅して為ゐ陸奥国朔日さんさく
の功を賞ー秋山八郎が働き法度かるれば賞罰の雄文
と称り勇名実を翳せり宗宣も鍛冶の誉を称ー
をけて伝説が勇威を感賞ー別に奉弧と称り父と共
に家司を命じたり伝説一刃の勇武忠孝を合わせて此家
とる事をうかがう皆扇が誅伐よりかりれば
其志を感ー父母に対してあらんに其事を語り某彼が
数名にあづこを又得くに書を書とあるを心かー兵其謝と
迷をんびをよあくれる不ありとやれい父もを扇が確

論を賞ー伝説が其情を断事を悲んで人をして家を
扇が身を金銀を償ふて仇方へ帰りとる刃の治りとあた
だーと扇屋のをとゝを語たるに扇大を悲くみ扇を停
びく其言を語りきれいを扇笑て八郎云い世の英雄あり
賤婦の頭を用て英名をあらせり而て自が誅を感ー
て其報をかさんとして未練の意情一点もかー勇士
かが頭くいかくれば英雄を侵く書とかゝべ婦をる
云の大事かゝんを云れども一刃を捨て生涯を仕んと覚
悟せー雅波の商家の子あり仕人殺して異人の婦とか
らんの心かー秋山君の志い感謝をたんで嘉が年齢
漸く廿四歳婦流全盛の時あり只仕侍にて新生の

親と呉して數年れ後又志尼丞ありとかうく辞し
きれいこと義も其言を行く秋山く迷るに之侍益
感ぜして竟に其英金を与義に贈り後来玉扇が
生活に働くよりとあり給れいま義大に喜びて玉扇もと
家の業を拡びて古来うけ抜くあるる玉扇を使
氣義に之の烈ある婦女にて英雄の志氣あり
夫娼中れ傑ある者なり其後玉扇が行末いかゞあ
ゆきんあるる者なりしかを形り

奇傳新話巻之三終